

## 〔学 会〕

## 東京女子医科大学学会 第211回例会

日時 昭和52年5月19日(木) 午後1時20分より

場所 東京女子医科大学本部講堂

## 1. 走査電子顕微鏡によるニワトリ小腸粘膜の発達にともなう変化について

(第一解剖) 野田 節子

ニワトリ胚の発生に伴って生ずる十二指腸絨毛の形態的变化の走査電子顕微鏡の観察に関しては、1972年に grey による絨毛レベルの報告があるが、今回演者は十二指腸と空腸についてそれを追試するとともに、さらに吸収上皮細胞と杯細胞レベルの観察を行なつたので報告する。材料は、ニワトリの10, 15, 17, 20日胚と、孵化後2日のヒナを用いた。その結果、十二指腸と空腸は、ともに下記のような発達段階を示した。10日胚においては、すでに *pre villous ridges* が隆起しており、その尾根の部分は不規則ではあるが *zigzag folding* がはじまっている。15日胚においては、*ridges* の数は増加し、規則的な周期をもつた *zigzag folding* をなして配列している。17日胚においては、*ridges* の尾根にあたる部分に将来絨毛になるための細胞集団が観察される。また、今までの *ridges* とは別に、隣接して新しい隆起がみられた。20日胚では *ridges* の根本の部分の増大と絨毛の伸張がみられ、孵化後2日ヒナでは更に著しい絨毛の発達が観察される。次に絨毛の先端に近い部分を構成する吸収上皮細胞と微絨毛レベルの比較を行なつたが、17~20日胚に比して、孵化後2日目の先端部のそれは著しい発達を示し、上皮細胞の高さにして2倍以上、微絨毛の丈にして2~3倍以上の数値を示した。さらに孵化後2日目の絨毛の深部、中間部、先端部分で同様の比較を行なつたところ、絨毛深部の細胞の高さと、微絨毛の丈は、17~20日胚の先端部分とはほぼ同じ値を示し、中間部、先端部分との間に著しい差があつた。また絨毛を構成するもう1つの杯細胞に関しては、10日胚ですでにそれらしき細胞をみとめうる。杯細胞についても、各々の胚において、また、20日胚と孵化後2日ヒナの絨毛では深部、中

間部、先端部分において、それぞれ特徴ある走査電顕像が観察された。

## 2. Chlorpromazine 投与ラットにみられる血糖および血中変動に及ぼす甲状腺ホルモンの影響

(薬理) 野本 照子・○永井 昇

常温下、ラットに chlorpromazine (CPZ) を投与すると、低体温がみられるが、それとともに高血糖を来すことが知られている。甲状腺摘除ラットでは、CPZ による体温変動作用が強化されることから、血中生化学的变化との関連性を明らかにする目的で、甲状腺摘除ならびに抗甲状腺剤投与ラットを用いて、CPZ 投与後体温変動、血糖および血清 Ca の動態を検討した。方法：成熟雄ラット、体重 200g 前後のものを使用し、無処置対照群、甲状腺摘除群 (Tx), propylthiouracil 投与群 (PTU) に分けた。甲状腺摘除は、外科的に甲状腺および上皮小体を摘除し、術後 1% CaCl<sub>2</sub> を飲料水として投与した。PTU は 100mg/kg/day を経口投与し、それぞれ7日目に実験に供した。CPZ は、10mg/kg 腹腔内投与、体温は thermister を用い、直腸温を計測、経時的採血は尾静脈より行なつた。結果：CPZ 投与後体温変動は、Tx・PTU 群ともに初期反応は対照に比し遅れてみられるが、30分後 - 2.5°C, 60分後 - 3°C, 120分後 - 3.2°C で回復傾向がみられなかつた。Tx+T<sub>2</sub> 投与群では、体温下降の軽減がみられた。血糖値は、体温変動とは逆に上昇し、対照群では30分後に最大値を示し、以後持続するが、Tx および PTU 群では120分まで持続的に上昇した。Tx+T<sub>2</sub> 群は対照群に近付く傾向を示した。血清 Ca 値は CPZ 投与後30分に peak を示す変動であるが、対照に比し PTU 群では高値、Tx 群では低値であつた。なお、これらの機序について報告を加える。

## 3. 腓腹神経に発生した Entrapment neuropathy の1症例